
黒の魔女

羽月

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒の魔女

【Nコード】

N5966Z

【作者名】

羽月

【あらすじ】

この世界では2種類の魔女があった。一方は褒め称えられる白の魔女。もう一方は、忌み嫌われる黒の魔女。忌み嫌われる黒魔女のお話。

カレー？（前書き）

思いつき小説です。

もう、本当ここに乗せるのもおこがましいのですが、再び調子にのり投稿しました。

気分を害された方はすぐにまわれ右でお願いします。

こんな小説でもOKという方はどうぞお楽しみ下さいませ！！

カレー？

世の中にはいい魔女と悪い魔女がいるってしててる？

いい魔女っていうのは、みんなを助けて誰かの力になれる人。

悪い魔女っていうのは、みんなの優しさを利用する人。

でもね？見方を変えればいい魔女が悪い魔女に、悪い魔女がいい魔女に見えてしまうことがあるの。

「お前はいつまでこの街にいるつもりだい！！さっさと魔女の森へお帰り！！」

この街では私の素性がバレてしまったらしい。

顔を見ると、そんな怒声が飛び交ってくる。

気づかれないようにため息を着くと私は買うものもそこそこの街を後にするしかなかった。

黒の魔女 リーフア。

それが私。

この世界では黒の魔女と白の魔女が存在する。

そして、誰が決めたのか黒の魔女は人々に不幸をもたらす魔女とされ、白の魔女は人々に幸福を与える魔女とされていた。

かと言って、魔法を使えない人間にそれを見分けることなどはでき

ない。

いや、正確には魔女自身見分けなんてつかない。
生まれたときは皆白の魔女として生まれる。

そして、何かの基準でいきなり黒の魔女となることがある。

それは魔女がもつ魔力の色で判別される。

だから、昨日までは魔力を使うときに白い光をはなっていたはずなのに、今日はなぜか黒く光る魔力を放つようになると言う具合にかく言う私もその一人だ。

ある朝起きたらなぜか自分の魔力に違和感を覚え、試しに暖炉に火を付けるため火種をつくる魔法を作れば案の定自分の右手から発せられる魔力の色が真っ黒になっていた。

さすがにその時は私も愕然とした。

まさか、自分が黒の魔女になるなんて思ってもみなかった。

そして、その日から私の人生はガラリと変わった。

「ただいま・・・」

『魔女の森』さっき誰かが言っていたその森こそ黒の魔女が唯一安全に暮らせる森である。

「おかえり〜！」

出迎えてくれたのは、ここで一緒に暮らしている姉の様な存在のルーシー。

もちろん彼女も黒の魔女である。

「あれ？リーファー元気ないね？何かあった？」

そう言つて頼まれていた買い物を袋ごとを渡す。

「あー！もうっ！リーファー！りんごとはちみつ買い忘れてるじゃない！！あれがないとカレーが物足りなくなっちゃうでしょ！！」

「・・・なんていうんだろ。どっかで聞いたことのある隠し味のような・・・」

なんて思っているのは決して口に出さずに私はその隠し味に必要な材料を買つて来れなかった理由を伝える。

「・・・バレた・・・」

その一言でルーシーはわかつたらしく、眉を寄せる。

「・・・バレたって、なんでまた」

先程までの明るさは一気に吹き飛ぶ。

「ん・・・。わかんない。でも、バレてた」

見た目では決してわかるはずがないのにもかかわらずこうして、私たちの素性がバレることが良くある。

そうなってしまうともう私たちはその街には入れない。

入ってもモノを売ってくれる店もなく食事すら取ることもできなく

なる。

「はぁ……。どうしていつもバレるのかしら。やっぱり白の魔女のせいなのかしらね」

ルーシーはため息を付きながら買ってきたじゃがいもと玉ねぎを取り出す。

「……次はどここの街にする………?」

入れなくなった街にいつまでもしがみついてもしょうがない。バレてしまったのならば、まだ誰も知らない街へと行けばいい話だ。

「そうね……。この周辺はもうないから少し遠いけど、今度から東のアルバーナ国へ行きましょう」

ルーシーはそう言う夕食の準備をするべく台所へと入っていった。

「……アルバーナ国………」

その名前をきくのは一体何年ぶりだろう。

ふと、思い出される街の景色に思わず眉間に皺がよる。

「……あんまり行きたくないな………」

水の国アルバーナ国。

東の大陸でも3番目に大きい街である。

食料品はもちろん衣料品も雑貨も色々と揃うであろう街に今更行きたくないとも言えない。

というか、行きたくないなど贅沢は行っていない。

正体がバレてこうして行けなくなった街はもう両手では数え切れない。

「・・・ま、私だって分かる人は居ないだろうな・・・」

着ていたコートをかけるため自分の部屋へと戻ると、ルーシーが片付けてくれたであろうベットの上にきちんと部屋着が畳まれて置いてあった。

「ん・・・、おひさまのにおい・・・」

その服を手にとり顔を近づけるとあたたかな日差しのおいに心が落ち着く。

「・・・ついでに着替えよう」

着ていたものを豪快に脱ぎ捨て裸になる。

「d k jふおえいにsごひえj」

術語を唱えると黒い煙のようなものに全身が包まれ天井へとその煙が消えていく。

「ふうゝ・・・、スッキリ」

体の汗や汚れを落とすのにわざわざ風呂へ行くのも面倒だった私は魔法を使い体を綺麗にする。

黒の魔女になって唯一いいことがあったのはこの魔力だった。

以前の白の時には、使えなかった魔法も黒になってから使える種類がかなり多くなった。

「・・・それでも、この魔力に対しての代償は大きい・・・よ」
綺麗になった体に先程の服を身にたとえば、台所からいい匂いがしてきた。

ぐうううゝ

どうやら、お腹は限界のようだ。
そそくさと再び台所に戻れば、ルーシーがちょうどさらに盛り付けたカレーをテーブルに運んでいるところだった。

「・・・手伝う」

あまりのお腹の空き具合に、とつと用意を済ませて食事にしたかった。

「ありがと！じゃあスプーンと飲み物をお願い！」

せっせとカレーを注ぎサラダを盛るルーシーの傍を通りスプーンを出した。

「d k え j ろ」

術語を唱えるとコップが飛んできて勝手に飲み物を注ぐ。

「こら！！リーファー！そんなことに魔法を使わない！！料理はどんな料理も自分で作るから美味しいのよ！！」

サラダを盛りながらぷりぷり怒るルーシーに口を尖らせながらもス

ブーンをテーブルへと運んだ。

「・・・作ってないもん。注いだけだもん・・・」

ぼつりとつぶやいた言葉はしっかりとルーシーに聞こえていたらしい。

「もう！そんな屁理屈いわないの！！いい？魔法を使うことによつて私たちの居場所はどんどんなくなるんだからね！もうちょっと慎重になりなさい！」

「・・・はいはい」

「リーファー！！」

ぐうううう

タイミングよくお腹の音になった。

「・・・お腹すいた」

がつくりうなだれるルーシーは頭を抱えながらひらひらと手を振る。

「もういいわ、食べちゃいなさい・・・」

ルーシーの様子など気にもせず私はスプーンをもってカレーを掻き込んだ。

「・・・美味しい・・・けど、甘い・・・」

「んもう！わがままいわないの！私は甘いほうが好きなんだもん！
」

どっちがわがままだ。

と、思ってもやはり作ってもらった手前そんなことは言わずもくもくと食事を進めた。

「・・・もう、本当にリーファはわかってるの？」

そんなことをブツブツ言っているルーシーの声は聞かなかった事にした。

ビル登場

朝から壊れそうな勢いで扉が叩かれ、まだ睡眠が足りていない私は
イライラしながらも扉を開けた。

「リーファー……おまつ……！　どういう事だよ！　なんでまたばれてんだよ……！」

[C] [N] [U] . . . [I]

ボタンと締めれば再び激しくドアが叩かれる。

「おい！ちゃんと説明しろって！」

どうあっても、私の眠りを邪魔したいらしい。

「
・
・
・
d
f
け
k
s
f
」

「！—っおっ」

扉の外で唸り声を上げる声が聞こえた。

「これで静かに眠れる……」

もそもそと再びベットに潜り込もうとすると、布団をルーシーに取り上げられた。

いつの間に居たのか……。

「・ ・ ・ 寒い ・ ・ ・ 」

ブルつと身震いをして、両手で自分を抱き込むようにベットの上で丸まる。

どうして、今朝はこんなに寒いんだろう。

「リーファー！！あれどうにかしなさい！！うるさいったらないのよ！！」

朝から元気なルーシーに思わず耳をふさぐ。

「・・・カエルにした」

「・・・は？」

「・・・もう、カエルにしたから静か。・・・おやすみ」

ルーシーの手から布団を取り戻すと頭までかぶり就寝。
かと思いきや再び布団がめくられる。

「リーファー！！昨日もあれだけ魔法をむやみやたらに使っ
言っただでしょ！！今すぐ元にもどしなさい！！」

もう・・・朝から散々だ。

ルーシーがキレると朝食がなくなってしまうので、しびしび
れる前に玄関に向かい扉を開ける。
びよんぴよんと跳ねるカエルが未だにそこにいた。

「えdえrf」

するとぽんつと音が聞こえ、黒い煙が沸き立った。

「リーファー！！」

「うるさい。あっちいけ」

しつしと手で払い扉を閉めようとすると、ガシリと扉を掴まれた。

「とにかく入れる。寒い」

そついうと勝手に部屋へと入っていく。

はぁーっと溜息をつきながら私もしぶしぶ奴の後に続いた。

「ビル！！うるさい！もつと静かにしてよ！近所迷惑じゃない！」

部屋に入るなり今度はルーシーの怒鳴り声が聞こえる。

朝っぱらからなんでこの2人はこんなに元気なんだろう。

そんな事を考えながら、私は再び自分の部屋へ戻ろうとした。

が、ビルに腕を捕まえられた。

「わりいわりい。だつて、またバレタつて聞いて、いてもたつてもいらなくてさ。…リーファー、逃げんなよ」

前半はルーシーに、後半は私に話しかけている。

逃げるなって言つたつて、腕を掴まれていたら逃げようがない。

とにかく、私は眠いんだ。

どうして、こんな朝早くから起きなきゃいけないんだ。

じろりとビルを見上げるがビルはニヤリと笑つてこちらを見ていた。

「言つとくけど、もう10時だ。朝早いなんて時間じゃねーぞ？」

・・・私にはまだ朝早い時間だ。

「そうよ、リーファーいい加減起きなさい。ほら、すぐに朝ごはんを用意するから」

そういわれ、しゅしゅ食卓につく。

「・・・で、なんでばれたんだよ」

「知らない」

「は？知らないって、お前またどこかで魔法つかったんじゃないのかよ？」

「使ってない」

「なら、なんでバレルんだ？白のやつに会ったとか？」

「会ってない」

「・・・おかしいなあ。お前、前もそんなんじゃないかったか？」

「・・・」

「誰かに恨み買ってたんじゃないの？」

「・・・今、あんたを恨んでる」

「・・・なんでだよ」

「うるさい。とにかく、うるさい」

両手で耳をふさぐ。

いつの間にかちゃっかり隣りに座っているのもめんどくさい。

「はいはい、あんたたち朝から仲いいわね。ほら、朝食よ。もうこんな時間だし、お昼ごはんも一緒にいいわよね？」

どんつと目の前に美味しそうな食事が運ばれてきた。

「いただきます！」

一口パンをかじると目が覚める。

「ほんと、食事のときだけは生き生きしてるわね」

くすくすと笑いながらルーシーは再び台所へと戻っていった。

「・・・なあ、今度はどこに行くんだよ」

隣りで肘をついてこちらを見ているビルはぼつりとそう言った。

「ん、もごもごもごもご」

「そっか、アルバーナか・・・」

・・・わかったのか。

口いっぱい食事をほおりこんでいる私の言葉がわかるとは・・・。

「ちょっと遠いから、一緒には行ってやれないな・・・。」

ばそぼそと何やら独り言を言っているようだ。
まあ、アルバーナは歩いていくには遠いしね。

私たち魔女には魔法があるから距離なんて関係ないけど、男に魔力はない。

そもそも、黒の魔女は忌み嫌われているのにもかかわらずビルがここに一緒にすんでいることが間違っている。

でも、ビルは幼いころに両親から捨てられ、今のビルのママ（黒の魔女）に拾われ育てられた為か、私たちを嫌う人間や白の魔女を憎んでいる。

いくら、元のあるべき場所へ帰れとビルのママが諭しても全く言う事をきかず、ずっとここに住んでいるのだ。

「だいひょうぶ……。びるがいたひょうがじゃま」

もぐもぐと口に入った状態でビルに返事をする、ビルも困ったように笑う。

「邪魔ってひでーな」

ビルは私の頭に手を載せぐしゃぐしゃと髪を掻き乱した。

「じゃ、また後で来るからそれまでに着替えとけよ」

そう言う、ビルは足早に我が家を後にした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5966z/>

黒の魔女

2011年12月20日19時47分発行